史林
第十三卷 第二號
昭和三年四月一日發行
（通卷第五十號）

研究

歷史の認識に於ける概念の機能

田邊元

一

我々の認識は凡て概念を媒介として成立する。歷史の認識もこの一般の規定に背くものでない。併しながら概念といふのは普通に論理學の敎へる如く、個々の特殊なる表象の對象に內在する普遍的なる徵表を內包として組織的に統一し、それに由つて特殊の對象を分類してその下に屬する特殊を外延として排列することを可能にするもの、といふだけでその本質が理解せられる如きものであらうか。成程博物學の如き所謂記述的自然科學と稱せられる學問の認識に於て現れる所の概念の本質は、ほゞ右の如き傳承的論理學の規定に由つても理解せられないことはないであらう。併し自然科學の中でも理論物理學の如きものに由つて代表

せられる認識の媒介となる概念の機能は、右の如き規定に由つては到底充分に理解せられない。況やこれ等の自然科學とは一般にその目的と方法とを異にする歴史の認識に現れるところの概念に至つては、或意味に於て右の如き論理的概念とは寧ろ本質上相容れない所を有するものであるとさへ考へられる。同じく概念とは呼ばれても、それが媒介すべき認識の種類に從つて本質上相異る所があり、一樣には考へられないのである。否、相異る種類の認識の本質的區別を明にするには、夫々の場合に於ける概念の本質的なる相違を示すのがその適當なる方法であるとさへいはれるであらう。私は今方法論の廣き問題に立入るつもりはないが、歴史の認識に於ける概念の機能を明にする爲めに、先づ普通に論理學の規定する右の概念の本質規定に對照せしめて歴史的概念の特色を考へて見やうと思ふ。

今述べた通り、普通の論理學に規定する所の概念の本質は、一方に於て特殊對象の表象に對し普遍を意味するのであつて、その普遍に包攝せられる特殊の屬すべき範圍を限定して、所謂外延なるものを形造る。特殊は一の概念の外延に屬するか否かに從つて分類せられることが可能でなければならぬ。特殊の對象が斯く一の概念に由つて表はされるかどうかを決定し得られるやうにその概念がはつきりと意識せられることを概念の明晰といふ。更に概念は此の如くそれの外延に屬する特殊を代表し、特殊の何れにも通ずる普遍的の規定を自己の內包として統一的に意味するものであつて而もその內包を形造る個々の徵表は夫々互に區別せられつゝ一定の關係に於て組織せられなければならぬ。斯樣に徵表の相互が區別せられながら全體相寄つて一の組織をなすことを概念の判明といふ。外延上の明晰と內包上の判明とは相俟つて概

念の論理的資格を規定する。斯かる資格を具備する概念が、個々特殊の經驗的對象を分類すると共に、夫々その外延に屬するところの特殊を、それの内包に由つて普遍的規定の一例として組織し理解せしめる。斯くて論理的なる概念に由つて無限に複雜多樣なる經驗が整理せられ組織せられて合理的なる認識が成立すると考へられるのである。その目的に適應するやうに、概念の明晰判明を確立するのが所謂定義である。定義に由つて、自然に發生した概念が學的反省の立場に持來されて明晰となると同時に、概念内包の組織が命題に展開せられて判明を得る。それが所謂『最近位類と種差とに由つて』行はれるのは、概念相互が特殊普遍の關係に於て排列せられる組織を形造る限に於て可能なる簡便方法たるに過ぎない。併しこの方法が古典的の定義法式と認められた程に、概念は特殊の普遍に對する包攝といふ關係に於て一般に形式的に成立つものと考へられるやうになつたのである。これが形式論理の解する概念の本質に外ならない。

此樣な概念の解釋がよく當嵌まるのは、曩にも觸れた通り、分類的記述を主目的とする學問、卽ち所謂博物學に於てなることは明白であつて縷說を要しない西洋に於ける論理學の發生地盤たる希臘思想に於ける經驗科學的思考法の特色から、考へてもそれは自然なことであつた。併し斯かる概念の解釋は殆ど常識以上に出でないものであつて批判的反省の立場から觀るならばそれは二重の不完全さを免れないものとも考へられる。卽ち第一には現實に發生する概念の中、右の如き概念の解釋からしては理解せられない、寧ろそれと或意味に於て正反對の方向を追ふともいふべき概念の種類があるので、右の解釋に當嵌まる概念の規定は一面的たることを免れないといはなければなら

ぬ。而して第二に、右の解釋に當嵌まる概念も、その方向に於ける概念の發展系統に於ては極めて初發の段階に相當するものであつて、その方向を典型的に代表するものとしては、この解釋に由つて盡すこと能はざる規定を要求する如き別種の概念を考へなければならぬのである。今私はこの二つの要點を、行論の便宜上第二の方から始めて說明しやうと思ふ。抑も右に述べた概念の本質規定に於ては、專ら概念を特殊なる經驗の概括といふ方面から觀るのであつて、我々がものを理解 begreifen するといふのは、それを一定の觀察の視點から普遍に包攝し、後者に於てそれの占めるべき位置に配置することをいふのである。併し今述べたやうに概念の內包を普遍なる徵表の組織として定義するに止まるのみでは、或特殊の經驗的對象がその概念の外延に屬するか否かを決定することが出來るだけで、內包規定そのものから外延

の範圍を積極的に限定することは出來るものでない。從つて斯かる概念構成に由つては經驗の概括組織をするといふも、たゞ現に經驗せられた特殊の對象に就いてそれの配屬を決定するのみでそれ以上に出でて現實の經驗を超え、未だ經驗せられざる特殊の對象を豫測し、普遍そのものゝ方から特殊を導出すことは出來ないのである。約言すれば與へられた經驗的特殊を分類するだけで、それを超えてこれを支配し、未だ與へられざる特殊をも普遍から豫測するといふ法則の機能を、右の如き概念はもつことが出來ないのである。然るに斯かる概念の發生した所以はもと特殊の經驗を概括し、內容上抽象を施す代りに外延上無限の特殊を統一し得る普遍を定立する爲めであつて、概念はそれの成立上與へられたる特殊を超えて無限を包括するものなのである。たゞ與へられたる特殊を分類するに止まらなければならないのは、未

だ內容上の抽象が不充分であると共に、特殊の分化する所以の原理を積極的に內包に取入れることが出來ない爲めであつて、經驗の概括一般化といふ傾向を徹底するならば、單なる分類から法則的支配に進まなければならぬのである。斯くて自然科學の認識は方法上單なる性質的記述に基く分類から、數量的法則の演釋的體系に進む。博物學に對立する數量的精密科學の概念は卽ちこの要求を充たすものである。斯くて右に述べた如き概念はこの函數的法則概念にまで發展すべき一般化的認識の概念構成に於ける初發の段階に相當するものであつて、內包の規定が直ちに外延の範圍を積極的に限定し、その內に發展すべき特殊の分化を法則的に示す所謂函數概念に至つて始めてその本來の使命が果されることになるのである。これが私の曩に指摘した第二の點である。然るに此樣な一般化的要求を滿足する概念の構成は、今述べた所で推測せられる如く、現實の經驗が示す所の無限に多樣なる性質上の特殊性を度外視して、たゞそれを全然抽象的なる數量上の相違を以て置換することにより達せられるものである。一般化の徹底は個性の斷念を以て始めて購はれる。記述的分類科學の概念構成は自然科學の方法論的理想から觀れば不徹底なものであるけれども、同時にそれは特殊性そのものに對する我々の興味を滿足するといふ點から考へて、精密科學の函數概念に比し、より多くの生ける內容を保持し、現實生活に對する親しさをより多く持つのである。而して我々の認識の中には斯かる現實存在、生、との密接なる關係を斷つてはならない、個性そのものに對する關心に由つて動かされるところの型が存する。此種の認識に於ては概念は、右の如く一般化概括の方向に徹底せられて、無限なる特殊の系統的排列を能くせしめる所にそれの機能が存するのでなく

斯かる外延的排列を斷念すると同時に、内包上夫々の對象の個性を充實的に包含するものたることを必要とする。從つて前述の如き方向に徹底せられるべきものとしての概括の機能とは全然異るところの機能を、その種の認識の媒介者たる概念は保有するのでなければならぬ。斯かる種類の認識が歴史のそれであることは今改めて言ふを要せぬであらう。歴史の認識に特有なる概念の構成は、實は初に掲げたやうな論理的概念の規定を以ては充分理解し得ざるものなのである。これが曩に私の指摘した第一の點に外ならない。この點を積極的に明にすることが出來たならば、歴史の認識に於ける概念の機能を知ることが出來るであらう。『自然科學の概念構成の限界』を說きて歴史的認識の特色を明にしやうとしたリッカートの思想に於ても、此點は必ずしも明とはいへない。我々は氏の說く如き『歴史の論理』より猶一歩遡つて、歴史的認識に於ける概念の非論理性を見ねばならぬ。日常生活に現れる言語の機能、その意味する概念の特色を知ることこそ、この問題を解く手懸かりであらう。歴史哲學者としてと同時に言語哲學者として不朽の位置を占めるヴィルヘルム・フォン・フンボルトの思想及びその流を汲んだディルタイの思想から我々は學ぶ所がなければならぬ。

二

歴史の認識として成立するには概念を媒介とすることはいふまでもない。我々は如何に過去の史料を理解 Verstehen することにより自己の體驗に於て過去を追驗するも、それが舞臺面の演劇を鑑賞する場合の如く單なる理解追驗に止まる間は未だ認識とはいはれない。認識となるには理解追驗の内容が概念に於て統一せられ、現實の生内容に對し何等かの抽離を以てそれに對立せしめられる爲めに、言語的表現に於て固定對象化せられて、

自己も隨時にそれに還つて自己の認識を理解し、他人も隨意にそれを理解してそれに參與することが出來るものとなるのでなければならない。卽ち歷史の認識も概念を媒介として組織統一せられ言語に由つて記述せられなければならぬ。而して言語の表現する所、概念の意味する所は常に何等かの普遍である。普遍なればこそ自己も他人もそれの理解に於て相關係する事が出來るのである。歷史の認識は個性の記述を目的とするといふも、それが認識として客觀性を有し、公共の文化財に屬すべき限り、普遍をそれの意味內容とする概念に於て成立するのでなければならぬことは明である。歷史の認識を成立せしめる概念も、それが概念といはれるのは、普遍をそれの意味內容とするからであつて、それに由り全然特殊的なる體驗內容を概括統一することは、前節に述べた概念の規定に異る所はない。併しながら歷史の場合に於ては特殊の體驗內容を概括するのは、これをその概念の外延に屬するものとして單に普遍概念の實例といふ位置に墮し、普遍の外延內に排列する爲めではない。却てそれの特殊なる個性に重を置き、他を以て換へることの出來ぬ獨自な性質を有するものとして、その獨得なる個性を概念に由つて表はさんと欲するのである。從つてその概念は概念である以上普遍を意味することを免れないけれども、その機能は概括よりも區別にあり、外延の限定よりも內包の特殊性定立にある。殊にそれが現實の體驗に於てたゞ理解追驗を通じてのみ普遍の內容に統一せられ得る如き、歷史の認識に特有なる精神生活の內容を表はす概念である限り、その概念內包は定義に由つて論理的に規定する能はざるものとなり、たゞ概念の表現たる言語を媒介にして夫々の主觀が自己の體驗を以てそれを理解的に充たす外なきものとなる。斯かる概念は前述の函

數概念と正反對に、後者がその內包に於て外延の發展を規定し、それに包攝せられる特殊の分化原理を揭げてそれ等の特殊を排列することを得しめると異り、たゞそれに屬する特殊の體驗內容を他と區別せしめる爲めに分界の框を置き、その框の內に於て個々の主觀をして、夫々自己の體驗を基底として、その普遍の意味を理解するに任ずるものである。卽ち此樣な概念は生ける體驗の內容が自己を體驗の全體から浮き立たせる爲めに、自己と類同なる內容に結び付き普遍として自己を定立せしめ、言語の表現に自己を固定するものに外ならない。約言すれば斯かる概念は函數概念が特殊を排列する機能を有すると正反對に、特殊を分化發展せしむる何等の法則を意味することなく、たゞ理解の指針を與へるに止まり、特殊の內容を全然主觀の體驗に委するものである。それはたゞ理解の媒介たる普遍者を言語的表現に於て固定するだけでその普遍者そのものを判明なる概念內包に表はすことは出來ないのである。何となれば、その普遍者そのものがたゞ體驗を通じて理解せられる外無き生ける內容なのであつて、如何にこれを命題の形に分肢して判明なる內包に組織することを試みても、その生ける內容そのものゝ何たるかに至つてはたゞ之を體驗に委する外無きものだからである。斯くて此種の概念にとつては、函數概念が數學的記號の如き其自身殆ど無內容にして規約に基く抽象的隨意的記號に表はさるゝと異り、その內面的形式に於て夫々の民族の世界觀を含むとさへいはるゝ（フンボルト）言語の表現が必然に本質的となる。言語はその簡單なる音聲的記號の背後に民族の歴史的體驗を荷ふところの、集團的體驗の表現であつて、それが直ちに夫々の民族に特有なる體驗を普遍的に意味するのである。概念は卽ちこの普遍的意味て外ならない。從つて歴史

的概念にとつてはそれと言語との關係は、函數概念とそれの記號との關係に於ける如く隨意的偶然的のものでなくして、全く必然的本質的のものである。論理は言語の記號から獨立すべきものであるといふのが近代論理學の主張であるが、その立場から觀れば歴史的概念は右の如き意味に於て論理と背馳することをその特色とするといはなければならぬ。歴史性と論理性とは實に正反對なるものであつて、後者は言語からの解放を要求し、前者は言語との內面的必然關係を要求するものである。我々は男性を意味する希臘語の『アネル』が狩獵か戰鬪に於ける勇敢を意味する語より出で、漢語の『男』が田に从ひ力に从ふところから觀て本來田の能力を意味したことを想ふとき、これ等の言語乃至文字成立の時代に於ける希臘民族と支那民族との歴史的體驗を此等の語の背後に觀ることが出來るであらう。歴史的概念と言語との關係は不可分離の內面的親近性である。歴史的概念はたゞ言語に於てのみ自己を定立して理解の媒介となり、體驗の統一をなすことが出來る。同時に言語はたゞ歴史的所產としてのみその意味を理解せしめる。而も言語は絕對に固定せられた產物ではなくして常に發展する活動たる一面を有するが故に、歴史の進行と共に常に新しき內容を盛つて、歴史的概念と並行する。兩者は雙關的に相規定して互に相俟ち發展するのである。斯くて歴史と言語とは相互に豫想するものとなる。特に歴史的概念は言語を離れて成立することは出來ないものであると思はれる。

併しながら飜つて考へると、言語は精神生活に於ける無意的無反省的所產である。從つてそれを表現とする概念卽ち言語の意味も、それ自身に於ては全く無反省なる自然的思惟の所產でなければならぬ。それは一方に於て夫々の語に由つて意味

せられる特殊の體驗內容の相互の區別を可能にし、その全體に當該時代に於ける民族特有の歴史的體驗を表現するものであると同時に、他方に於ては語の意味に於て常に普遍を統一し、それに由つて無限に多樣なる體驗の概括的組織をなすのである。卽ち前述の歴史性と論理性との對立を藉りていへば、言語はそれ自身に於ては歴史性と論理性とを未だ分化せざる初發の狀態に於て結合するものであるといはれる。從つてこの統一的に結合せられる二つの傾向を區別し、反省的有意的に夫々の方向を純化發展せしめるとき、始めて論理的概念と對立する歴史的概念が現れるのであるともいはれるであらう。言語の有する概括の機能を發展せしめて、漸次に普遍的なる類概念を作り、更にそれに理論の根柢を與へて法則的概念に及び、終に函數概念に窮極するとき、言語は論理性の方向に於て徹底せられる。自然科學の概念構成は常識に於ける言語の中に含まれる論理性の發展に外ならない。此點から考へて、學といへば直ちに自然科學を意味する如く思はれたことがあるのも、學問を主として論理的方面から觀た結果としては無理ならぬ所があるといはなければならぬ。これに對して歴史學も認識たる以上概念を媒介としなければならぬのであつて、その意味する普遍の特殊に對する關係はその限り論理的たることを失はないのであるけれども、本來個性的認識を目的とするこの學に於ては、概念の概括も個性記述の手段としてこれに從屬するのであつて、この目的を離れてそれ自身自主的目的となり、その方向を徹底的に追求することは許されないのである。歴史に於ては普遍を意味する概念も、たゞ特殊を概括統一することが終局の目的なのではなく、寧ろ特殊を比較してそれの相違を示し、夫々の個性を明にする爲めに役立つのでなければならぬ。卽ち概

括は目的でなく手段なのであつて、比較媒介たることをその機能とするのである。一言にしていへば歴史に特有なる概念は比較概念たることを本質とする、而してその意味する所の普遍は夫々の時代に於ける夫々の民族に固有なる體驗の類型に外ならない。從つて、比較概念として形式的に特色附けられる歴史特有の概念は、内容的には類型概念として特色附けられるといはれるであらう。

類型概念も概念として概括統一をなすものなることは改めて言ふまでもないことであるが、それは比較概念として、たゞ概括をそれ自身の目的とするものでなく、却てそれによりその表はす所の特殊の對象の、他の概念に由つて表はされる特殊對象に對して有する相違を示し、由つて以て當該特殊對象の個性を明にするに役立つことを目的とするのである。而して類型といふ以上は、類概念や法則概念の場合と異り、特殊の對象がその類型の普遍性を表はすに種々の程度があることを必然的に含意して居る。一の特殊なる對象が或類に屬するか否かは程度の差別を容れない選擇的關係であるのが、論理の要求である。さうでなかつたら分類といふことは論理的嚴密を以て行はれることは出來なくなるであらう。法則の場合に於ても同樣であつて、一つの特殊なる事實が普遍の法則に支配せられるか否かは程度の別なき選擇的關係である。勿論一の事實は單一なる法則に支配せられるものでなく、多くの法則に支配せられるものであつて、その法則相互の間に反對の傾向を意味するものがあれば、一の法則に支配せられる部分に大小の相違を現はすことはある。併しそれは該法則の支配を受ける部分がその事實の全體に及ばないといふことであつて、その部分に就いて考へれば法則の妥當不妥當は絶對的全體的であり、程度の相違を容れるとは考へられない。これが論理の

要求なのである。然るに類型はこれと異り、本來それ自身に於て程度的量的相違を容れるのである。一の特殊對象が如何なる程度に於てそれを實現するかといふことにより、その對象を個性的に特色附けることが出來る普遍的媒介たるものが類型なのである。類型は論理的に分類して積極か消極かの對立に二者擇一の決定をなさしめる爲めの標準ではなく、その内に於て無限の差等を容れる階段の如きものである。斯く階段的に程度の別を容れるが故に、その内に於て或特殊の占めるべき位置を指定することにより、それを個性的に特色附けることが出來るのである。こゝに類型概念が函數概念の如く本來數量的抽象的でなくして、而も程度的なることにより具體的量的の個別化を或程度まで能くする所以がある。併しながら右の如く一般的に考へられた類型概念は歴史にのみ特有なるものではない。本來この概念は人種の記述に於て發生したものではないかと思はれるが、單に分類に止まらず更に個性の記述を要求する認識に於ては一般にこの概念がはたらき、博物學の如きものに於てさへ、それが一般化分類の半面に個性記述的要求を伴ふ限り、類概念自身がそれだけ機能上類型的性質を有することになるのである。歴史に於ける類型概念は單に右の如き類型的性質のみを以てその本質が盡されるものではない。それでは此場合には如何なる特色があるか。それは既に前に述べた所を回顧して容易に答へ得べき如く類型が歴史に於ては外からの觀察でなく内からの理解に由つてのみ得らるべき内容を以て充たされることである。歴史に特有なる概念は理解を通じて體驗の内容が類型の普遍に統一せられ、言語に表現せられて、その内に特殊の個性が程度的に規定せられ得る媒介を意味するのである。而してリッカートなどが歴史の個性記述に限定的に附加し

た價値關係的といふ特色も、價値性は本來量的なるものであつて無限なる程度の相違に於て現れるものであるが、恰も類型はそれの本質上程度的量的規定を容れるものなるにより、歷史の要求する價値性をその概念內包に攝取することが出來るのである。但し價値關係的といふ如き規定はリッカートに於てなほ外面的なることを免れないのであるが、歷史の類型概念は斯かる規定を外から受ける如き意味を含むところの、體驗の內面的統一をそれの概念內包とするものである。それは本來それ自身歷史的體驗の表現たることを本質とする言語に於て自己を定立し、その相互結合に由つて對象の個性を理解せしむべき機能を有する。而して逆に、本來無限の意味聯關に於て全體性の內に發展する體驗はまた、それを組織統一するに右の如き歷史的類型概念に由るのでなければ、その個性的生命を維持することは出來ない。理解の框としての類型概念こそ個性的生命發展の認識を目的とする歷史學に特有なる概念であるといはれるであらう。

以上簡單ながら私は歷史特有の概念の機能を、普通に概念の典型と考へられて居る論理的概念のそれに對照し、本質上寧ろ後者と正反對なる特色を有するものとして示した。經驗科學の內に自然科學と歷史學とを對立せしめることは、必然的に概念に就いても兩種の機能を區別することを要求する。歷史的概念は論理的概念と對立して言語の內に生きる體驗の類型を意味するものであるといふのが私の結論である。

（三、二、二〇）